

国際会議の当日は、心配した雨もなく快晴であった。山田は、かさを持ち歩くことを常としない外人のために、かさまで用意していた。用意周到とはこのことか。横山は感心した。

横山の普段の格好は、ボタンドウンシャツにチノパンであるが、今日は、久しぶりに紺のスーツにネクタイを締めていた。もちろん、山田も正装である。典子も受付開始の一時間前に到着して、学生にいろいろな指示を出してくれている。横山は、その横で、ただ眺めているだけであった。

受付時間になると、多くの参加者がやってきた。典子は、手際よく参加者に名前を聞いて振り分けている。当日登録の参加者もいるが、今のところ目だった混乱はない。

すると、受付の学生が急に緊張しはじめた。海外からの参加者である。受付の学生に英語で話しかけると、急に学生は固まったようになった。自分の出番とばかりに、横山が助け舟を出そうとすると、典子が横からずっと割り込み、流暢な英語で説明しだした。

「なんだ、これなら自分がここに居る意味がないな」

と思いながら、横山は受付の様子を眺めていた。

それにしても、典子さんはこまめによく働くなと感心しながら眺めていると、いやな視線を感じた。見ると、山田がだめだめというように首を振っている。そんなに妹のことが心配なのであろうか。

初日の受付は滞りなく終わった。すでに、会議のオープニング行事も始まっている。はじめに、学長や来賓などの挨拶があったあとは、父の中村の講演のはずである。後は、それほど参加者の登録はないはずである。

実は、横山は自分の父が話すのを聞いたことがない。テレビなどでのコメントはよく耳にするが、まとまった話は始めてである。今回は、ぜひ聞かせてもらおうと思っていた。受付は、典子と学生にまかせて、会議場に移ろうとする

「タク、あなたはタクじゃない？」

と大きな女性の声がした。見ると、女性の参加者である。

横山は驚いた。キャサリン・ティモシーがそこに立っていた。アメリカに留学していたころの友人である。

「キャシー！ どうして君がここにいるんだい？」

と横山が聞くと、キャサリンは横山のところに走ってきて、急に抱きついた。

アメリカ式の抱擁はしばらくぶりであるが、横山も仕方なく抱きとめた。受

付の学生は何事かとみな興味津々である。典子も目を大きく見開いている。

驚いたことに、キャサリンは、国際関係論を専攻して、アメリカの大学の助教授になっていた。今回の国際ワークショップの招待講演者のひとりという。横山は、ろくにプログラムを見ていなかったで、全然気づかなかった。とは言っても、名前を見ても、すぐに思い出さなかったかもしれない。

「キャサリン、いまからプロフェッサーナカムラの講演がある。一緒に聞きに行かないか」

「あらもうそんな時間だった。ちょっと一時間時間を間違えたみたいね。私も、その講演だけは聴かなきゃと思っていたの」

「それはきっとサマータイムのせいだよ。急ごう」

そう言うと横山はキャサリンの手をとって会場に急いだ。

傍から見ると、まるで恋人どうしのように映ったであろう。横山はまわりの視線が気になったが、会場に急いだ。

アメリカ時代の横山

国際ワークショップの初日は無事終了した。山田は、何事もなく会議が進行したことにほっとしていた。少し不安だったが、妹の典子に、受付の手伝いを頼んで良かった。こういうと、申し訳ないが、横山では少し心もとなかったのだ。

明日の夜にはバンケットがある。こちらは、大学の近くのホテルにすべて任せてあるし、司会の横山に不安はなかった。なにしろ、宴会は得意分野だ。

今日の中村の講演は本当に素晴らしかった。英語そのものは、ネイティブに比べればそれほどうまいわけではないが、何しろ内容が充実している。中村の自論は、国際関係を論ずるには、二国間だけの狭い世界で判断してはいけないというものである。

例えば、日本では、日米関係というと日本とアメリカの二国だけに着目して、それぞれの利害で判断しようとするが、国際関係はそんな単純なものではない。常に、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、ロシアという世界的な視野に立って考えなければならない。

日本は、過去あまりにもアメリカ一国だけを見てきたし、実際に、その政策に服従していれば、大概の問題は、うまく解決できてきた。しかし、日本は世界の有力国のひとつとなったのである。日本は平和憲法を信奉していると言いながら、アジア諸国から脅威に映るような行動を平気でしている。予算だけを見れば、自衛隊は、世界の中で世界第二位の軍隊である。中国、韓国の台頭も著しい。このような情勢をよくわきまえたうえで、国際関係を考えなければ、判断を誤るというものである。

山田は、最近の国連における世界各国の動きを思い出していた。日本は、おろかにも、安全保障理事会の常任理事国入りを目指している。日本は、アメリカが応援してくれるとばかり思っていたが、実際には、アメリカはその阻止に動いたのである。完全に、日本側の状況判断が間違っていたことになる。

中村は、国際連合は、けっして世界全体の代表ではないという。それは、第二次世界大戦において旧連合国がつくった組織であり、いまだに日本に対して敵対条項がある。そのような組織で、常任理事国になろうとすること自体が間違いである。日本は、むしろ、たった五つの国によって支配されるといういびつな常任理事国制度を廃止するよう訴えるべきであるというのが中村の考えであった。

山田は、かつてフランスの研究者と国連活動について議論したことを覚えている。日本は、求められるままに国連に金を出す、その活動に対していっさい注文をつけてこなかった。

国内では、国連が決定したことに黙って従えば、それで間違いがないと考えているひとが多い。しかし、国連という場合は、世界各国がいかに自国に有利な条件を引き出すかという権謀術数の世界なのである。

その結果、日本の国連への出資金はアメリカについて二位であるが、発言力はまったくない。フランスの研究者は、日本の貢献を過小評価していた。日本の出資額が、フランスよりもはるかに多いと山田が言うと、それならば、なぜ、それに見合った発言をしないと逆にたしなめられた覚えがある。高等弁務官に日本人が就いたぐらいで大喜びしては、他国にすべて利益を奪われてしまう。

中村は、国際政治は、広い視野にたって国際関係を論ずる必要があると訴えた。そのためにも、国際的視野に立って議論できる人材の育成が急務であるとしている。残念ながら、現在の日本には、あまりにも国内問題だけに注意を向けている政治学者が多すぎると苦言を呈していた。

山田は、中村の講演を思い出しながら、自分の考えを巡らしていた。日本の国際社会にあるべき姿、これを真剣に考えなければ、世界で日本は孤立してしまうかもしれない。そして、山田はもうひとつ重要なことを考えていた。

実は、日本が海外と接する時には、外国は国としてひとつの考えにまとまっていると錯覚していることが多い。これは間違いである。アメリカにも中国にも、異なる思想をもった連中が大勢いるのだ。

そして、その利害関係のなかで妥協の産物として国家戦力が練られる場合もある。ある特定のグループの思想を、その国の考えと単純化するのは誤りである。そのことを理解するためにも、山田は中村のような国際的な人脈を築きたいと思った。それには、このような国際会議は格好の場である。

今夜、山田は、招待講演者のひとりであるキャサリン・ティモシー博士を接待することになっていた。人脈づくりには格好の機会である。

ティモシー博士は、アメリカの現フォレスト政権で、大統領ブレーンを務めるほどの人材である。まだ若いが、フォレスト大統領が州知事を勤めていた時代に、政治に関する懇談会で知り合いになり、信頼を得ているということだった。

残念ながら、山田は女性の扱いには不慣れである。情けないとは思ったが、妹の典子にも同席するように頼んでいた。典子は、山田と違って非常に社交的である。同じ親から生まれたとは、とても思えない。

午後に受付の様子を見にいった時、典子はティモシー博士と横山が知り合いだと話していた。ふたりは公衆の面前で抱き合ったらしい。不謹慎と憤慨していたが、いったい、どういう仲なのであろうか。

山田は、一瞬、今夜の席に横山も呼ぼうかと思ったが、横山はなぜか、中村

教授が招待した一行と一緒に付いていってしまった。まさか、あの有名な中村教授とも親交があるのであろうか。山田は、横山のことがますます分からなくなった。

あの明るい性格は、何事にも変えがたい宝であり、山田もそこが大好きなのだ。しかし、ちょっと頼りない。そう思っていたが、ひょっとしたら、すごい大物なのかもしれない。

山田は、ティモシー博士が滞在しているホテルの中の和食レストランを予約していた。ティモシー博士が和食好きと聞いていたからだ。長旅で疲れているので、すぐに部屋で休めるようにという配慮から、ホテルのレストランを予約した。

国際会議では、相手を歓迎したいという気持ちから、つつい手の込んだ接待を考える。しかし、海外から会議に参加するひとは、大概、多忙なひとたちである。旅で疲れたうえに時差もある。できれば、早く休みたいというのが本音であろう。せっかくの好意だからと、無理に付き合っている場合も多いのである。

食事は午後七時から予約していた。典子は、受付の業務をこなした後に急いでレストランにかけつけてくれた。約束の時間よりも十分も早い。接待の苦手な兄を気遣ってのことであろう。

山田は、妹のことが昔から大好きだった。歳が離れているせいもあるが、友達づきあいの下手な山田には妹が大親友のような存在だったのである。妹の典子も、よく山田になついてくれた。中学校ぐらいからは、逆に山田の面倒をみってくれるようになったのだが。

山田は、典子には幸せになって欲しいと願っていた。そのため、横山には紹介せずにいたのだ。横山は、性格はいいが、相当のプレイボーイと聞いている。典子が気に入っても、捨てられるかもしれない。そんなことから、過剰ともいえる防御に入っているのである。横山は少し気分を害しているかもしれない。会議が終わったら、あやまろうと思っていた。

ティモシー博士は、午後七時きっかりに現れた。シャワーを浴びてさっぱりしたようだ。ティーシャツにジーンズというラフな格好である。山田が、気楽な格好で来てくれといったからだ。

キャサリンは

「アキラの言葉に甘えて、こんな格好で来ましたが、よろしかったかしら」と聞いてきた。

山田は

「もちろんです」と答えたあとで

「これは、妹の典子です」

と言って、典子をキャサリンに紹介した。

「ああ、受付にいた英語のすごくうまい子ね。わたしは、てっきりタクのフィアンセかと思っていたわ」

といたずらっぽく笑った。

山田は思わず強い口調で

「そんなことはありません」

と言ってしまった。しかし、すぐに少し失礼だったかなと後悔した。

「だって、わたしとタクがハグしたら、すごい顔でにらんでいたでしょう」

と典子に言った。

典子は

「そんなことはありません。あまり突然のことだったのでびっくりしただけです」

と答えた。

山田は、話題が変な方向に向かったので、あわてて

「それでは、ディナーの用意ができています。席の方に移りましょう」

と案内した。

テーブルには、すでに前菜が載せられていた。キャサリンは

「日本食は、味もいいけど、この色合いがなんともいえず素晴らしいのよね」

と感激している。

三人はビールで乾杯した。

キャサリンは日本語で

「トリアエズ、ビールデスネ」

と言っている。かなりの日本通だ。

キャサリンは、日本酒が大好きというので、ビールのあとは吟醸酒を頼んだ。

かなりいける口である。食事も最高である。今日のメインがしゃぶしゃぶと聞くと、キャサリンはワンダフルと喜んでいる。典子は

「キャシーは、どうしてこんなに日本通なのですか」

と聞いた。すでに三人は、アメリカ式にファーストネームで呼び合うことにしていた。

「それは、ボーイフレンドのタクのおかげよ」

とキャシーは言った。

典子は

「やはり、キャシーはプロフェッサー・ヨコヤマのガールフレンドだったんですか」

と聞くと、キャシーは

「タクがプロフェッサー？」

と言って驚いた。横山は英語ができるので、会議の手伝いのアルバイトに来ていたのかと思っていたらしい。

キャサリンは、典子に向かった

「タクの昔話を聞いてみたい」

といたずらっぽく笑った。

「そんな別にいいです」

と典子はそっぽを向いた。

それからのキャサリンの話は、ふたりを大いに驚かした。

横山が、アメリカの西海岸にある私立大学に編入してきたのは、キャサリンがソフモアつまり二年生の時であった。この大学はアメリカでも有名な名門で、入学試験が難しい。どうして、横山が、この大学に編入できたかは大いに謎だったという。

日本人にしては、背が高く、甘いマスクの横山は女子生徒の話題になったが、あまり英語が話せなかったのも、最初はなかなかなじめなかったようだ。

ところが、三ヶ月の間に英語がめきめき上達し、クラスの友達とも自由に会話ができるようになった。その頃、横山はホンダの新車を購入して、みんなを誘った。横山はクラスの友人と一緒に、よくドライブに出かけたという。

ただし、アメリカの優秀な大学に通う学生は、よく勉強するので忙しい。金曜日までは授業で一杯である。ようやく週末に遊べる程度だ。だから、多くの学生は横山と遊びたくとも、普通の日には遊べないのである。

驚いたことに、横山は、ウィークデイは大学の近くにある老人ホームに通い出した。アメリカの大学では、ボランティア活動がカリキュラムに取り入れられている。横山は、一度、大学の実習で出かけた老人ホームが気に入ったようで、その後も何度も訪れていた。

そして、いつのまにか老人ホームの人気者になっていたのである。横山は、年寄りが大好きだ。くだらない冗談にも、お年よりはみな喜んでくれると、うれしそうにクラスメートに語っていた。

なんと得意のテニスも老人にコーチしだしたようで、それまで運動とは無縁だったひととも体を動かすようになったとホームの園長が喜んだ。また、横山は、得意のピアノを弾きながら、日本の歌も披露していたようだ。

老人ホームの住人は、横山の訪問を大歓迎した。ところが、毎日のように通ってくる横山に、次第に講義の方は大丈夫かと心配しだした。

横山は、ここに通うと単位がもらえるんですよと、平気な顔をして老人たちを安心させたという。山田は、横山のあの明るい性格なら、年寄りにも気に入られるだろうと微笑ましく思った。

横山は、週末には、クラスの人々と遊んだ。映画にもよく出かけたらしい。キャサリンも、一緒に遊んだという。夜は、みんなで飲んだり騒いだりして、楽しく過ごしたとキャサリンはなつかしそうに、大学時代を回想した。横山は、宴会を盛り上げるのが上手で、みんなから慕われていたという。

キャサリンは、将来は弁護士か研究者になろうと考えていたので、必死になって勉強した。しかし、週末は横山やみんなと楽しく過ごした。それが、よいストレスの発散になったという。

この頃、横山は、みんなを日本食レストランによく連れて行ってくれたらしい。実は、安い店なら別だが、本格的な和食を出す店は、アメリカの大学生にとっては高嶺の花なのである。はじめて飲んだ吟醸酒は、とてもフルーティーで爽やかでおいしかったとキャサリンは懐かしんだ。吟醸酒のおかげで、友人たちは、みな日本酒ファンになったという。

ある時、女の子の間で、横山のことが話題になった。あれだけ遊んでいてもステディーがいないのである。普通、アメリカの大学生には付き合っているボーイフレンドやガールフレンドが居る。みんなと騒いでいても、最後にはふたりだけの時間を過ごしたりする。

ところが、横山はみんなと騒いだあとは、ひとりで自分のアパートに帰ってしまう。女の子が横山の部屋に入っていくのを誰も見たことがない。実はホモではないかという変な噂まで流れた。

そう言えば、キャサリンも横山と二人きりになったことがあるが、手を握られたことも、くどかれたこともない。

「自分には魅力がないのかしら」

そんな風に思ったりもした。キャサリンは、横山のことが嫌いではなかった。いや、もし横山さえ良ければステディーになってもいいと思っていたのだ。

そのうち、女の子の間で、誰が最初に横山と付き合うかがかけの対象になった。他愛のないものであったが、何人かの女の子は真剣に横山を狙っていたようだ。それでも相変わらず、横山はひとりの女の子とは決して遊びに行かなかった。みんなが居る前では、結構、女の子とふざけあったり、じゃれ合ったりするのだが、いざ、二人きりになると素っ気なくなる。

ある時、キャサリンは思い切って、横山のアパートにひとりで出かけていった。

ドアを開けた横山はキャサリンが一人なのを見て驚いたようであった。それでも、快く中に入れてくれた。おそらくキャサリンが、横山の部屋に入った最初の女の子であったろう。実は、横山の部屋が汚れに汚れているために、女の子を連れ込まないのではという噂もあったが、部屋はとてもきれいに整頓されていた。

部屋に入ると、横山は

「ビールでも飲む？」

と聞いてきたが、キャサリンはコーラを頼んだ。横山は、ていねいに應對してくれたが、いつものような明るい乗りではなかった。キャサリンは思い切って聞いてみた。

「タクはどうして女性とつきあわないの」

「ちゃんとつきあっているじゃないか。結構、楽しいよ」

「いえ、そうじゃなくて。ステディーっていう意味よ。誰かつきあっている人はいないの？」

すると横山は思い切ったように、自分の秘密を口にした。

横山は私生児であるという。父はいるが、正式には認知されていない。母は、いわば日陰ものである。父は母を愛しているが、正式な妻はほかに居る。横山は父がとても大好きだが、母を正式な妻にしない父は許せないと言った。

そして、自分は、けっして女性を不幸にはしたくない。だから、生涯、愛する女性はまだひとり。自分が納得して、このひとならば結婚してもいいという女性が現れるまで、自分は女性とは真剣に付き合わないのだと告白した。

キャサリンは

「自分ではだめ」

と聞いたかったが、その言葉は飲み込んだという。

その後も、横山は多いにみんなと遊んだようだ。いつものタクに戻って。

ただし、キャサリンだけは、横山の本心を知っていた。そして、二年ほどして横山は日本に突然帰って行ってしまった。みんな横山のことは、なつがしがっているという。

「タクはいったい何を大学で教えているの？」

とキャサリンは聞いてきた。

山田が、現代米英語で、いまはハリウッド映画の台本の解説をしているという、と、キャサリンは納得した。

「タクは、本当に映画が好きだったからね。でも、大学の教授なんて本当に驚き、あの頃の友人たちもみな驚くわ」

と言っている。

「なにしろタクは勉強しなかったから」

とキャサリンは付け加えた。

横山が、結婚を前提としなければ女性と真剣に付き合わないと言っているという話を聞いて、山田は本当に驚いた。横山はてっきりプレイボーイだと思っていたからだ。

何人もの女性を泣かせてきたに違いないと勝手に思い込んでいたのだ。

しかし、そういえば、教授会でセクハラ裁判が行われた時、横山は女性の側にたって発言していた。横山が女性を大切にするというのは本当のことかもしれない。

さらに、横山が私生児だったということも驚きだった。そういえば、横山の家庭の事情については聞いたことはない。山田は、妹の典子は横山のことをどう見ているのだろうかと思った。

すると、キャサリンは典子をみて
「ノリコ、どう安心した。タクは、誰とも真剣に付き合ったことはないのよ」
そして、こう付け加えた。
「わたし、ショウコを見たとき、このひとがきっとタクが一生大切にしたいひとかもしれないと思ったの。だから、ちょっとだけいじわるをしたのよ。ごめんね」

すると、典子はあわてて
「プロフェッサー・ヨコヤマとは、つい最近知り合ったばかりで、つきあっているわけではありません」
と弁明した。

「だったら、付き合えば。絶対にお似合いよ、ふたりは」
とキャサリンは無責任なことを言っている。

山田は複雑な気持ちだった。いままで、横山は女にだらしないものと信じていたから、典子には紹介したくなかった。

しかし、実際は、その正反対である。これならば話が違う。でも、典子と横山が結婚したら、自分は横山の兄になってしまう。そんなことを考えていると典子は

「おにいさん、何を考えているの。もうしゃぶしゃぶ用の肉が来ているんだから、キャシーに料理してあげて」
と言った。

するとキャサリンは
「しゃぶしゃぶはタクにさんざんご馳走になったから、自分で調理できる」
といって、湯に肉を浸した。キャサリンは和食を堪能したようで、ずっと上機嫌だった。そして、九時には部屋に戻っていった。明日の発表の準備をするという。

山田は、肝心の国際関係論に関する話をキャサリンとできなかったことに気づいた。でも、横山の秘密を聞いたことの方が有意義だったかもしれない。

ふと、横の典子を見た。典子は、横山のことを、どのように思っているのだろうか。

